

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2018 年
No. 86

2018年5月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会

THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 中山博邦
© JASE. 2018 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

GID(性同一性障害)学会・第20回研究大会・総会 報告……………	1
思いこみのめがね②……………	6
多様な性のゆくえ⑬……………	7

性教育の現場を訪ねて⑭……………	8
今月のブックガイド……………	10
JASEインフォメーション……………	11

◎ GID（性同一性障害）学会・第20回研究大会・総会報告

「性別を越える、性別を超える。二元論からの飛翔。」

GID（性同一性障害）学会・第20回研究大会会長／はりまメンタルクリニック院長
針間克己

はじめに

GID（性同一性障害）学会 第20回研究大会を2018年3月24日と25日、御茶ノ水にて開催しましたので報告します。

このたびは第20回という節目に当たる大会でした。私自身第1回目から毎回参加し、学会でのこれまでの歴史や発表や議論、人との出会いと別れ等思い出すことが多々ありました。また若手気分で参加してきた私が、このたび大会長の重責を果たす立場になるとは、まさに歳月の流れを感じざるをえませんでした。

ただし、過ぎ去りし歳月をただ振り返るだけではなく、現在の我々が将来に向けて、どのようなことを考え、何をなすべきという、未来に向けても意義のある学会にしたいと考えました。

そこで、4学会のテーマを「性別を越える、性別を

超える。二元論からの飛翔。」にいたしました。

「性別を越える」は言うまでもなく、男性、女性の性別の境界を越える、という我々の中心的命題を意味します。ただ、ジェンダーの多様な在り方を考えると、医学的、あるいは法的、社会的に男女の性別の境界を越えることばかりが、普遍的な解決とは限りません。すなわち、従来の性別概念の枠組みを超え、新たな自分らしいアイデンティティを形成していくことも、もう一つの視点として考慮すべきことかと思われました。この視点が「性別を超える」ということです。

「二元論」という言葉からは、多くの人が「男女二元論」を連想すると思います。その通り、「二元論からの飛翔」には、「性別を超える」と同様に、従来の古典的男女概念から脱却し、新たなジェンダーのありようの構築といった意味が込められています。ただ学会テーマの「二元論」は、男女二元論に限定したものではありません。我々の周りには、ほかにもいくつか

の二元論に基づく議論が渦巻いています。

たとえば、「身体」と「心」という二元論があります。「身体の性別と心の性別が一致しない」、という表現がよく使われます。しかし、「身体」と「心」は単純に二分されるものでもありません。「心」は「身体」の一部である脳の働きによる現象ですし、「身体」も「心」の影響で変わっていくものです。「正常」か「異常」か、という対立もあります。疾患概念ではない「トランスジェンダー」か、疾患概念の「性別違和」か、という議論は、常に沸騰しています。

ただこういった議論は、真理の探究というよりも、同じ現象に対し、どのような視座で捉えるかという、個々の信念やポリシーの表明という側面が強いという気がします。このようないくつかの二元論がある中、対立的に二つの概念に分けてとらえるのではなく、より高い視点から統合的に深く広くとらえるため、大空に飛翔しよう、といった意味のテーマだったのです。

近く改定される予定の ICD（国際疾病分類）では「性同一性障害」は「Gender Incongruence」と名前が変更されるだけでなく、精神疾患でも身体疾患でもない第3のグループとして分類され、さらにグループ名では「Conditions related to sexual health（性の健康に関する状態）」と「condition」という言葉が使われ、疾患としての明確な位置づけは留保されています。まさに「二元論からの飛翔」がそこでも起こっているのです。

しかしながら、理念や思弁が先走りしすぎるのは、議論が空疎なものになりかねません。学会では上記のテーマを掲げながらも、経験やエビデンスに基づき、内容の濃い議論をしていきたいと考えました。そのテーマに基づき、シンポジウムや講演を組みました。大きな流れとしては、まず過去を振り返り、現状の諸問題を論じ、未来を検討していくという時間軸も意識しました。では次節より、学会の主たるプログラムを振り返ってきたいと思います。

主たるプログラム・第1日目

◆手術手技研究会、エキスパート講習会

1日目は、午前中に専門家向けに、プレプログラムとして、手術手技研究会、エキスパート講習会があり

GID (性同一性障害) 学会
第20回 研究大会・総会
 2018.3.24(土)-25(日)
 会場 御茶ノ水ソラシティカンファレンスセンター (東京)
 会長 針間 克己 (はりまメンタルクリニック)
 性別を越える 性別を超える 二元論からの飛翔
<http://gid20.kenkyukai.jp>

主催プログラム
 3月24日 (土)
 12:30-13:30 大会開演 「性別を越える 性別を超える 二元論からの飛翔」
 針間 克己 (はりまメンタルクリニック)
 13:30-14:30 特別講演 「GID 学会 20 年の歩みを振り返る」
 三橋 隆子 (明治大学文学部)
 14:30-15:10 特別講演 「性同一性障害の医療活用」
 谷合 正明 (夢城病院)
 中澤 祥也 (岡山大学大学院健康科学研究科)
 15:10-16:30 シンポジウム1 「ICD11 における「gender incongruence」への変更の背景と影響」
 16:30-18:10 シンポジウム2 「性同一性障害特例法の課題」

3月25日 (日)
 9:00-10:40 シンポジウム3 「Xジェンダーって何？」
 10:40-12:00 シンポジウム4 「トランスジェンダーへの心理的支援」
 12:30-14:10 教育講演 「2020 年東京五輪の選手の性別はいかに決定されるか」
 謝安 聡 (埼玉医科大学病院産婦人科)
 14:10-15:10 教育講演 「子宮移植の現状と今後の可能性」
 野呂 信彦 (京都大学大学院医学研究科)
 15:10-16:40 シンポジウム5 「私たちのつくる明日」
 16:30-18:00 シンポジウム6 「性別違和のある子どもたちの居場所づくり」

【参加費】
 医師・看護職・心理士・教師等資格取得者・研究者 8,000 円
 一般 (上記以外) 3,000 円
 入会金 (年会費) 2,000 円
 懇親会 (3月24日 (土) 18:20~) 5,000 円

本部事務局
 はりまメンタルクリニック
 〒101-0062 東京都千代田区神田小川町3-24-1
 カスタリア都室の森102
 TEL 03-5281-4800 FAX 03-5281-4801
東京事務局
 株式会社ウイケア (イブ コンベンション事業部内)
 〒104-0041 東京都中央区新富1-18-4 テラカンビル6階
 TEL 03-3552-4170 FAX 03-3552-4178
 E-mail gid20@uicall.co.jp

ました。手術手技研究会は、外科系の医療者向きに、実際の手術手技を研究する会です。エキスパート講習会は、性同一性障害の認定医になるために、必要な講習会です。

また今年度からの性同一性障害への手術の保険適用にあたっては、担当医師の中に認定医がいることが条件の中に織り込まれています。両方の会ともに、数年前から始まったものですが、例年 10～20 名程度の少人数の出席者の中で行われていました。ところが今年は、100 名近くの方が出席されました。保険適用が決まり、医師の間でも急速な意識、関心の高まりがあると実感させられる出来事でした。

◆会長講演と特別講演

学会のメインプログラムは、12 時半に開始予定でしたが、12 時過ぎくらいから、受付に数十メートルの長蛇の列ができ、12 時半になっても、列は長いままでした。多くの人に参加していただき、大会長としてはうれしい悲鳴でした。できるだけ多くの人に最初から参加していただきたいと思い、15 分待っての開始としました。

最初は私の会長講演です。普段の講演では主催者か

ら「性同一性障害の現状」などの、テーマを与えられての講演となりますが、今回は自由に話せますので、普段は話せない自分の思い出話をさせていただきました。

最近の若者は、性同一性障害者特例法が、当たり前のように昔からあると思っているのですが、なかった時代から、法律制定までの苦労話もさせていただきました。講演をしながら気がついたことも、ここに記します。私が性同一性障害に関わるきっかけの一つが、東京家庭裁判所に医務室技官として勤務していた時に、梶村太市裁判官に性同一性障害の医学的概念について説明を求められたことでした。

のちに梶村氏は弁護士となり、性同一性障害で女性から男性へと戸籍を変更し、結婚し、代理精子を用いて子供ができた時、嫡出子として認められるべきだという論文を書きました。この論文のおかげもあり、嫡出子として認められるとの判決が最高裁で出ました。この世界に私を導き、今なお活躍される梶村氏への感謝と畏敬の念を過去を振り返る中、あらためて感じました。

次は、三橋順子先生の特別講演、「GID 学会 20 年の歩みをふりかえる——医療者でもなく、当事者でもなく——」でした。三橋先生は、私とともに、数少ない GID 学会の皆勤賞であるとともに、女装やトランスジェンダーの歴史研究で著名な方です。さすがに、豊富な資料や写真とともに学会や日本の GID 医療の歴史を振り返る講演でした。さらに、日本の性同一性障害医療は立ち上げの際、既存のトランスジェンダーコミュニティを排除したことや、日本の現状が脱病理化が進む世界の動向に無関心なことへの指摘もありました。

ともすれば、医学モデルだけに偏りがちな、本学会の中で貴重なご意見でした。

◆ 特別報告・性同一性障害の保険適用

次は、保険適用の特別報告でした。このプログラムは当初予定していませんでしたが、昨年秋に今年度からの保険適用化が、報道され、にわかに関心の高いテーマとなったので、急きょ組むことにしました。報告は参議院議員の谷合正明先生、GID 学会理事長の中塚幹也先生にお話しをいただき、厚労省の担当者からもコメントをいただきました。



左から、中塚幹也 GID 学会理事長、谷合正明参議院議員、針間克己大会長

ポイントとしては、今年の 4 月から、性同一性障害の手術は保険適用されるようになった。しかし、ホルモン療法は自由診療のため、ホルモン療法をしている場合は混合診療にあたり、手術は保険適用できない。保険適用は、日本精神神経学会の定めるガイドラインや、GID 学会の認定医制度に基づき、一定の基準を満たす施設においてのみ行われる。といったことでした。

また谷合議員からは、ICD-11 の gender incongruence への変更後も継続されること、特例法における手術要件の議論とは切り離される旨のご発言もありました。

いずれにせよ、今回の保険適用は極めて限定的なものであり、ホルモンの保険適用実現という課題を残すものといえるでしょう。

◆ ICD-11 における「gender incongruence」への変更の背景と影響

次は ICD-11 についてのシンポでした。今年発表予定の ICD-11 では「性同一性障害」は「gender incongruence (性別不合)」と名前が変更され、精神疾患ではなく、「Conditions related to sexual health (性の健康に関する状態)」というグループになるのです。

松永千秋先生からは ICD-11 の動向が、トランスジェンダーである畑野とまと氏からは国際的な脱病理化の動きが報告されました。また中塚先生は「今後も、疾患としての側面を認識していただくための啓発を継

続ける必要はあり、医療は重要な活動分野として位置づけられることは変わらない」と述べられました。また GID（性同一性障害）学会の学会名の変更についても言及されました。

◆ 性同一性障害特例法の課題

次は特例法のシンポジウムでした。

現在、国際的に問題となっているのは、法的な性別変更手術に手術要件を求めることです。2014 年、世界保健機関等による声明では、性別変更のための手術要件の撤廃を勧告しています。

この勧告に関しては、GID 学会は 2017 年の理事会で、支持するとの決定をしましたが、その後の総会で反対意見が出たこともあり、学会ホームページ告知やマスコミ発表といった動きにはつながっていません。反対意見が出ることや、学会の動きが鈍い理由として、こういった意見は「性同一性障害には手術は必要がない」との主張につながり、保険適用化に向けての阻害要因となる、といった考えもあるからです。

そのような議論の中で、このシンポは開かれました。

「手術要件の撤廃」と「手術の保険適用化」が、まるで相反する逆ベクトルの主張のようにこれまで言われてきた中で、法学者の谷口洋幸先生が国際人権上、「性自認の尊重」と「医療を受ける権利の尊重」はともに基本的人権であると明確に述べられたのが、印象的でした。

◆ 懇親会と全国交流会

1 日目の終了後は、懇親会が行われました。

私、三橋順子先生とならび数少ない第 1 回目からの皆勤賞組の、佐藤俊樹先生にご挨拶をいただきました。

懇親会にはさまざまな方がいましたが、性別違和のある学生のための制服に取り組んでいる学生服メーカーの人がいたのは驚きでした。関心の高まりの広がりを感じさせる出会いでした。

また同時間に別会場では「GID 全国交流会」も開かれました。この会は、毎年 GID 学会に合わせて、全国の当事者グループの人たちが集まる会です。情報交換や交流を深める貴重な機会です。今年も、100 人以上が参加し、盛り上がっていました。

主たるプログラム・第 2 日目

◆ Xジェンダーって何？

2 日目は、まず X ジェンダーのシンポジウムから始まりました。

「X ジェンダー」とは「自分は男女どちらでもない」といった新たなタイプの性自認のあり方で、最近の若者の間で増えています。

各種の LGBT 統計調査等でも、人口の数パーセントはいるとの結果となっています。シンポジウムでは当事者、研究者ともに、このあらたな性自認のあり方を、前向きにとらえようという議論でした。

また、X ジェンダーは和製英語で海外にはない言葉なのですが、会場からの質疑等から、1990 年代に関西で使われ始めたのが、始まりであることが確認されました。

◆ トランスジェンダーへの心理的支援

続いて、トランスジェンダーへの心理的支援をテーマにシンポジウムを行いました。

手術の保険適用に伴い、性同一性障害の診断と治療を定めているガイドラインの重要性は高まっています。いっぽうで X ジェンダーをはじめとする、多様な性別違和のあり方を持つ者が増えた現在、ガイドラインだけでは心理的支援は対応しきれません。認知行動療法や当事者の支援など、いくつかの異なる角度から、心理的支援について議論されました。

◆ 2020 年東京五輪の選手の性別はいかに決定されるか

昼休みと総会ののちに、午後のプログラムが始まりました。まず、難波聡先生にオリンピックにおける選手の性別決定のあり方をご講演いただきました。

これまでに、性分化疾患を抱える選手たちの性別決定では様々な議論がなされてきた。

現在は、血中テストステロン濃度が主たる決定要因となっている。濃度が 10nmol/L 未満であれば、女性としての資格を得る。ただ、性分化疾患については、選手からの訴訟もあり、まだ流動的なところもあるらしい。

男性から女性へのトランスジェンダーについては、出場前の12カ月間、血中テストステロン濃度が10nmol/L未満であったことを示すだけでよく、性別適合手術の有無は問われない。

◆ 子宮移植の現状と今後の課題

次に菅沼信彦先生に子宮移植についてご講演いただきました。

子宮移植と聞くと、なにかSF小説のような遠い話のように感じるが、現在、スウェーデンで7例の成功例があるなど、現在すでに実現可能な技術となりつつある。

日本でも菅沼先生を中心に学会が立ちあがり、技術的、倫理的検討が始まっているとのこと。また子宮移植には当然、子宮の提供者が必要ですが、FTM（女性から男性への性別変更者）の性別変更では子宮切除術をおこなうため、子宮提供者の候補となりうる。

FTMへの意識調査では、多数が移植に協力的、好意的だったとのこと。ただ私の感想としては、子宮をほしい人とあげていい人がいる、と両者がそろっているからこそ、より慎重に生殖倫理の観点からの検討が必要ではないかと感じました。

◆ 性別違和のある子供たちの居場所づくり

プログラムの都合上、午後の講演との同時並行で、第二会場で、「性別違和のある子どもたちの居場所づくり」のシンポジウムも開かれました。

第二会場は100名が定員なのですが、子供についての参加者の関心は高く、立ち見でいっぱいになって、さらに会場から人があふれ出るほどの熱気に包まれていました。

居場所作りをしている人の発表とともに、実際に居場所に参加している子供たちも登壇しての議論となりました。性別違和のある子供たちへの対応は、「ホルモン療法の早期開始」など、もっぱら医学的対応ばかりに注意がいきがちですが、こういった居場所づくりや、子供たち同士のかかわりが持つ力のすばらしさを再認識させられました。

◆ 私たちの作る明日

学会の最後は、若く社会で活躍しているトランスジェンダーの方々に、活動や抱負を語っていただきました。

当初FTM 3名のみとなっていたのですが、当日は2名のMTFのかたがたにも登壇していただきました。

皆さんとてもエネルギーに社会で活動されており未来への希望を感じました。また、新たに市議になられた、入間市の細田智也議員、根室市の保坂いずみ議員のお二人とも、自然体なのが印象的でした。上川あやさんが議員になった時は、トランスジェンダーであることに強い重責を感じていたように思ったのですが、若い議員さんは自分のセクシュアリティに関して、もっと自然体で政治活動をする、そんな時代になったのだと感じたのです。

◆ ユニバーサルデザインの学会

シンポジウム、講演以外にも、一般演題35題、ポスター4題があり、GID学会らしく、多様な専門性からの研究で、バラエティに富み、充実した内容でした。その中で特に印象に残ったのが、川端伸哉先生による「日本手話のLGBT表現に見られる非対称性」でした。

日本手話におけるLGBT表現が、性行為そのものを示し、差別性を有しているという指摘でした。この発表があったこともあり、今回の学会では、多くのプログラムに手話通訳を置くことにしました。聴覚障害のある人もより一層理解していただけたと思います。会場の構造上、車いす利用に問題はなく、旧知の車いす利用の友人も参加されていました。手話通訳も含め、いかにユニバーサルデザインの学会開催をしていくかということも、深く考える契機となりました。

最後に

2日間にわたり、641名と多くの方に参加していただきました。第20回という節目の大会であり、また学会のテーマは「性別を越える、性別を超える。二元論からの飛翔。」と、大風呂敷を広げたものでしたが、素晴らしい演者と参加者の議論により、なんとか、意義のある学会になったのではないかと思います。皆様にあらためて感謝したいと思います。

来年の第21回GID学会は、2019年3月23日、24日に岡山県医師会にて、岡山大学病院ジェンダーセンターの難波祐三郎先生を大会長にして開催されます。皆様の参加をお待ちします。

思いこみのめがね

シゲせんせーのポジティブライフ

鈴木茂義 Suzuki Shigeyoshi



公立小学校非常勤講師。14年間の公立小学校正規教諭、主任教諭を経験。専門は特別支援教育、教育相談、教育カウンセリングなど。

突然ですが、私はめがねをかけています。高校生くらいから視力が悪くなり、めがねをかけています。コンタクトレンズをつけていた時期もありますが、今はずっとめがねをかけています。今まで何本くらいのめがねを作ってかけてきたのでしょうか？ 20本くらいでしょうか。そのめがねを通して、いろいろなものを見てきました。いろいろな人も見ました。いろいろな自分も見ました。新しいめがねをかける度に、ものがちゃんと見えました。めがねを通して見えることが全てだと思って、たくさん失敗もしました。「星の王子様」の本の中で、「本当に大事なものは目には見えない」という内容に触れたときに、ハッとしたこともありました。

結局、私は自分の見たいように子どもたちを見て、自分を見て、世の中を見ていたのかもしれない。学校の仕事でうまくいかないことがあると、子どもや同僚のせいにしていじけていたこともありました。「あの子は昔から乱暴な子だから」「あの先生はいつも意地悪をするから」と見ていたわけですから、ポジティブライフとは程遠いものでした。

小学校の先生になって1年目、先生ホヤホヤのとき。掃除をきちんとやらない子を厳しく叱ったことがありました。その子はしょんぼりしながら「前の担任のA先生の方がよかったな」とぼそっとつぶやきました。私はとてもショックで、その場で動けなくなってしまいました。今までと違うやり方で、子どもとかかわらないといけないなあと思いました。今までと違うめがねで、子どもを見る必要がありました。しかし、どうすればよいかそのときはよくわかりませんでした。

小学校の先生になって5年目、近隣の小学校の先生たちと体育の指導法について研究をしていました。私が代表の授業をすることになっていて、必死になって授業の指導案を作っていました。「めあてはどうする？ 手立てはどうする？」と焦る私に、先輩の先生が「シゲせんせー、あなたは結局何がやりたいの？」と聞いて

てきました。ショックでした。私は指導案を仕上げることに必死で、目の前の子どもたちに体育を通してどんなことを伝えたいのか、どう成長して欲しいのかを全く考えていませんでした。めがねはかけていても、子どもを見ていなかったのです。いいめがねをかけていたとしても、それは何も見ていないのと一緒にでした。

6年生の担任をしていたとき、女子グループの子どもたちがトラブルを抱えていました。私はその女子グループにすぐに介入して、話を聞いたりたくさんアドバイスをしたりしました。するとそれを聞いていた子の一人が、「シゲせんせーは何でも自分の力、担任の力で解決できているでしょ？ それは大間違いだからね」と言われました。背中をバットで殴られたかのような衝撃でした。「この子たちは担任の自分

が介入しないと、トラブルを解決できない子たちなのだ」と自分のめがねを通して見ていました。私は、再びめがねを変える必要が出てきました。「子どもを信頼する」というめがねです。翌日以降、その子たちは自分たちの力で話し合いを重ねていました。試行錯誤している姿にやきも

きしましたが、その様子を新しいめがねでぐっと見ていました。数日後、その子たちが人の少なくなった放課後に私のところへやってきました。「シゲせんせー、私たちもう解決したから大丈夫です！」(ドヤ顔)。私はそのとき、子どもに負けた気がしました。「先生は子どもには負けてはいけない」と思いこんでいたのですが、そうではありませんでした。負けたのにもかかわらず、とても清々しい気持ちになりました。

いろいろな子どもたちや保護者との出会いの中で、友人や恋人の出会いの中で、思いこみのめがねは進化していきました。今は「よく見る、よく聞く、よく話す」ことを通して、相手のことも自分のことも「ありのままめがね」で見ようとしています。

ゲイの小学校の先生であることをカミングアウトしてから、また新しいめがねを買いました。尊敬している人を真似して買いました。このめがねを通して、尊敬している人に近づけたらいいなあと思っています。でもきっと、また失敗することもあるんだろうなあ。

第2回

思いこみのめがね よく見る、よく聞く、よく話す

多様な性の ゆくえ

One side/ No side [13]

コンドームというメッセージ媒体

オリンピック選手村のコンドーム配布について話を続けよう。

国際オリンピック委員会（IOC）は2004年の初めにスポーツを通じたHIV予防対策に取り組むことを重要な方針のひとつとして採択し、同じ年の6月には当時のジャック・ロゲIOC委員長と国連合同エイズ計画（UNAIDS）のピーター・ピオット事務局長が、若者のHIV/エイズ教育などに協力して取り組むための合意文書に署名している。

さらに2010年10月には、ピオット氏の後任のミシェル・シディベUNAIDS事務局長がスイスのローザンヌにあるIOC本部を訪れてロゲ会長と会談し、HIV予防に向けた協力の強化を改めて確認した。

IOC会長はその後、ロゲ氏からトーマス・バッハ氏に代わっているが、UNAIDSとの協力関係はいまも継続している。

UNAIDSの公式サイトにはシディベ氏とロゲ氏の会談の様子を伝える報告記事が掲載されている。コンドーム配布に言及した部分を日本語訳で紹介しよう。

(http://asajp.at.webry.info/201309/article_4.html)

『UNAIDSとIOCの協力関係は、2008年の北京五輪ではとりわけ大きな成功を収めた。「安全にプレーし、HIV感染の拡大を止めよう。あなたの周りの世界を守る。そのための役割を果たそう」という北京五輪のキャンペーンは、IOCと北京五輪組織委員会、UNAIDSが共同で企画し、実行したものだ』

このキャンペーンの主要イベントのひとつが、選手村でのコンドーム無料配布だった。前回は1988年ソウル五輪か1992年バルセロナ五輪が最初と書いたが、平昌五輪（今年2月）開幕前のCNNニュースによると、最初はソウル五輪だったという。

その配布の目的が、少なくとも2008年には明確に示されるようになった。

『北京五輪では啓発活動として、約10万人のボランティアの若者を対象にHIVと性の健康に関する情報を提供した。選手村では、良質のコンドーム10万個、

およびHIV予防や差別との闘いに理解を求めるリーフレット5万枚が、パッケージにして配布された』
ということはつまり、選手にはリーフレットとコンドーム2個がパッケージになった啓発資材が5万セット配られたことになる。

そのコンドームは選手村で使用することも可能だろうし、お土産として持ち帰り、それぞれの国の若者に安全な性行動について、話をするきっかけに利用することもできる。五輪アスリートが話をすれば、そのメッセージは少年少女に説得力をもって入っていくのではないか。

蛇足かもしれないが、注意喚起の意味もあるので、あえて繰り返せば、そのメッセージは『HIV予防や差別との闘いに理解を求める』ものである。スポーツ選手はさぞかしお盛んであろうといった推定をもとに10万個のコンドームが用意されたわけではなかった。もう一つ、IOCのファクトシート『スポーツを通じたHIV&AIDSの予防』からも3つの重要な指摘を、これも日本語訳で紹介しておこう。

(http://asajp.at.webry.info/201309/article_3.html)

- HIV陽性のスポーツマン、スポーツウーマンの参加は、HIVを特別視せず、偏見と闘ううえで非常に貴重である。
- 優秀な運動選手はロールモデルであり、彼らの意見はコミュニティレベルで予防とケアのメッセージを届けるもう一つの方法となる。
- スポーツ組織は所属選手をHIV感染から守ることだけでなく、HIV陽性者に対する偏見や差別を持たないように指導することも大切である。

前回は書いたが、2020年の東京五輪では15万個のコンドームが用意されるという話を人づてに聞いた。その話が本当だとすれば、北京の次のロンドン五輪と同数になる。なぜ15万個なのか、どのような意図と方法で配布されるのか。せっかく準備するのなら、そのあたりも自覚しながら、有効なメッセージを発信していく工夫を担当する方にはお願いしたい。

[東海大学付属大阪仰星高等学校] (下)

さまざまなつながりと学びで 広がっていった「思春期講座」

中高一貫校である私立東海大学付属大阪仰星高等学校では、中等部・高等部の6か年を通して思春期講座を実践している。2010年から始まって、今年で8年目。当初は性教育の実践を提案しても却下され続けていたという。思春期講座の中心になって活動している高等部の若杉雅代養護教諭に、ここに至るまでの過程をお話しいただいた。

性教育の実践まで、長い道のりだった

思春期講座の一環として行っている「カフェテリア式の授業」は、生徒たちがそれぞれ自分の興味のある講義を選んで学ぶユニークな方式。2017年度は12講座が開催され、生徒や講師、教員たちから好評を得て無事終了した。

思春期講座の中心を担う若杉雅代養護教諭は「まだまだ、課題は多いです」としながらも「赴任当初は、性教育の実践を提案してもまったくとりあげられませんでした。しかし、一歩、また一歩と手探り状態で歩みながら、ようやくかたちになってきました」と赴任当時のころを振り返る。

「本校に赴任したてのころ、職員会議で子どもたちの性の意識調査をしたい、性のことを教えたいと性教育を提案したのです。しかし、即座に却下されました。ちょっとショックでした。そこで、自分自身もっと勉強をして、自分の言葉できちんと性教育の必要性を訴えよう。同時に、仲間づくりもしていこうと思ったのです」と若杉養護教諭。

それからは、“人間と性”教育研究協議会に入って研修に励んだり、日本家族計画協会主催の思春期保健相談士のセミナーに通ったり、公益社団法人誕生学協会の誕生学アドバイザーも取得するなど、さまざまな民間研究団体の学習会に通った。

また、養護教諭サークルや学校保健会、枚方市保健所管内高校連絡会などでつながった養護教諭からさまざまな情報を得ることができて、保健所との連携もできるようになったという。

東海大学付属大阪仰星高等学校

校長・揚村洋一郎

【中等部】生徒数 266 名 教員数 23 名

【高等部】生徒数 1,124 名 教員数 55 名

(2017 年度在籍者)

学びを深めていくうちに、中・高6学年を通して性教育を学ぶことの重要性をますます実感し、再び職員会議で性教育の必要性を訴え、性教育という言葉にアレルギーをもつ先生方も多いので、まずは「思春期教育」という言葉を使って、中・高6か年の間の思春期講座の導入を提案した。その結果、2009年に思春期検討委員会が発足することになる。メンバーは、保健体育科1名、家庭科1名、人権教育部（中・高）各1名、健康推進室長、中等部養護教諭、高等部養護教諭など7名。



若杉雅代養護教諭

「みんなで思春期講座の内容を検討し、中・高6か年の指導計画を立ててきました」（若杉養護教諭）

時間の確保と講師探し

導入当初も現在もむずかしいのは、思春期講座の時間を確保することであるという。

「中等部では、総合学習や道徳の授業など、思春期講座の時間がある程度確保ができるのです。でも、高等部のほうは、なかなか時間確保がむずかしい……。思春期講座に先立って4月の最初に『保健の日』を制

2017（平成29）年度に実施した思春期講座

学年	学年 テーマ	実施した授業テーマ	講師等
中学1年	大切な 二次性徴 のち	心の健康について	スクールカウンセラー
		第二次性徴かわっていくからだ 男子：勃起と射精の仕組み 女子：月経の仕組みと妊娠	総合保健学習
		(1)どんな子どもだったのだろう (2) 家族	家庭科授業
中学2年	人間関係の とエチケッ のツール	「楽しく学校を送るために～仲間と絆をつくろう～」	有沢孝治 (東海大学准教授)
		「いのち～生命誕生といのちの大切さ～」 誕生学アドバイザーからいのちのお話	河原尚恵 (助産師)
中学3年	異性との 情報選り と関わり	「相手の気持ちを考えたコミュニケーションのとり方」	岡本峰淑 (臨床心理士)
		「いのちのつながり～自分も相手も大切に～」 中学3年生のための誕生学	並川メリー (誕生学アドバイザー)

学年	学年 テーマ	実施した授業テーマ	講師等
高校1年	のかけがえ ない私	「性の健康、幸せな関係」 人権的な観点での性のお話	関口久志 (京都教育大学教授)
		「いのちとは」 外部講師10～12団体	カフェテリア 式性教育
高校2年	にも暴力防 止被害者 にならない ために加害 者	「ライフスキルセミナー」 (生涯にわたって健康に生きるために) *高2・高3合同実施	松本真奈美 (看護師・保健師)
		「対等な関係をつくろう」 デートDV防止授業	松村徳子 風味良美 (参画ネットなら)
		性意識と性行動の選択、健康な結婚生活 欲求と適応規制、妊娠・出産・避妊 家族計画と人工妊娠中絶、性感染症と その予防	保健教科
高校3年	生涯を 健康に 通	「ライフスキルセミナー」 (生涯にわたって健康に生きるために) *高2・高3合同実施	松本真奈美 (看護師・保健師)
		「こころの危機とどう向き合うか」	近藤卓 (日本ウ ェルネススポ ーツ大学教授)

定して、健康診断と同日に『保健講話』を実施していましたが、それでは不十分なのでもう1時間思春期講座をとらせてください、とお願いしました。保健体育や家庭科の教科指導内容を確認しながら、ロングホームルームなどの時間を性教育のために有効に使えないかを検討してきました」。

他校の養護教諭とのつながりから、カフェテリア方式の授業を行っている学校に同僚を連れて行くなどして、高校1年生は、5年前からカフェテリア方式の授業を導入した。しかし、初年度は予算ほぼゼロで進めることになったと、若杉養護教諭。

カフェテリア方式の授業を実践するために、まずは、講師探しからはじめなければならない。

「誕生学協会の講師のつながりから助産師さんを紹介していただいたり、養護教諭のつながりで産業カウンセラーの方を紹介していただいたり、高校の同窓会つながりから、音楽や朗読、傾聴などで『ひとりだけひとりじゃない』というメッセージを伝えている声楽家の方などを紹介してもらいました。さまざまなつてを頼って、講師の先生方を集めました」と若杉教諭は当時を振り返る。

たまたま参加した講演会の講師を務めていたフォトジャーナリストの人に直談判をしたこともあったという。支払えるのは交通費のみ。断られるのを覚悟で講師を依頼すると、若い世代に伝えたい熱い思いがある各分野の専門家の方々は、思春期講座への強い思いに共感して引き受けてくださることが多いという。



助産師が講師の授業の様子

2013年、助産師やフォトジャーナリストなどさまざまな分野の講師の先生方によるカフェテリア方式の授業が始動した。

生徒たちも教員の反応もよいのだが、「保健講話もカフェテリア形式の授業も、やりっぱなしのところがないなっています。本当はホームルームなどで思春期講座のことを話題にしてさらに掘り下げてほしいのです。しかし、ホームルームでは、キャリア教育や人権教育もしないといけない。思春期講座の感想を話し合う時間が確保できないのです」と若杉養護教諭。

また、学校内の委員会の数が多く、教員の負担が大きいことから、昨年思春期教育委員会が廃止され、現在は「健康推進室」が主体となって思春期講座を進めているという。

「まだまだ乗り越えなければならない壁がありますが、今後も試行錯誤しながらいろいろな形で思春期講座を充実させていきます」とバイタリティあふれる若杉養護教諭の今後の活動に期待したい。

(取材・文 中出三重／エム・シー・プレス)

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

性教育の重要性を再確認

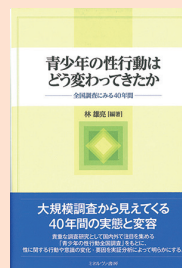
セクハラ問題で辞職した高級官僚（当人は否定？）、その任命責任者である大臣の発言、「セクハラとは縁遠い方々」と Twitter に書き込んだ国会議員、セクハラ告発方法に関連して「ある意味で犯罪だと思う」という元文部科学大臣の発言内容。いずれも性に関する知識、人権意識のなさに驚きを隠せない。

一方で、相変わらず「性教育バッシング」が行われている。多くの大人たちの性に関する意識は変化していない（？）。では、若者たちは変化してきたのだろうか。

本書は、1974 年より 7 回にわたって実施されてきた「青少年の性行動全国調査」の時系列的な実証分析によって、日本の若者の性行動や性に関する意識の変化と社会環境とのかわりについて論じたものである。このような分析は本邦初と言えるだろう。なお、この分析の基になっている調査は、日本性教育協会が中心となった調査で、第 8 回調査も既に終了し、この夏にも第 1 次調査報告書が公表される予定であるという。

第 1 回調査の行われた 3 年前の 1971 年、総理府（当時）の調査報告書『青少年の性意識』の冒頭に「1970 年代には性が爆発的にはらんするであろうとの予測がなされたようである。フリーセックスが流行しているといわれ、若者の不軌奔放の性行動が問題になった。」という記述がある。

当時を多少なりとも知っているが、それはほんの一部のことで、現実的な実感はなかったという印象が残っている。「フリーセックス」という言葉が流行語になってから既に 50 年近くになる。この間、若者を取りまく環境の変化は著しい、少子化、高学歴化、ICT の発展と普及、それに伴うコミュニケーション手段の多様化、そしてジェンダー意識の平等化が進んでいくな



青少年の性行動は どう変わってきたか

全国調査にみる 40 年間

林 雄亮 編著
ミネルヴァ書房
定価 6500 円＋税

か、若者の「性」の何が変わり、何が変わっていないのだろうか。

本書は、その問いに答えようとした試みである。3 分野 11 の観点から、それぞれ 7 名が分担して分析を行っている。

まず、「性行動の実態とメカニズム」では、①青少年の性行動の・性意識の趨勢、②青少年を取りまく家庭内・家庭外の環境とデート経験、③青少年の性行動と家庭環境－性交経験の有無とタイミングに着目して、④初交時の避妊の状況とパートナーの影響——「同い年」の増加と勢力関係、の 4 観点。

「性に対する態度とその変容」では、①性に対する否定的イメージの増加とその背景、②「性的なことへの関心」の意味とその変容——性に対する意識・行動との関連について、③性や恋愛に消極的な若者——その内実と友人関係の影響、④ 21 世紀における親密性の変容——「リスク」としての性行動、の 4 観点。

「性についてのリテラシーと性教育」では、①青少年の性被害経験は増えているのか——見知らぬ人・身近な人からの暴力、②性について知りたいこととその時代の変化、③青年期のジェンダーとセクシュアリティ形成——ヘテロノーマティビティへの方向付け、の 3 観点。

いずれの観点においても、性教育を受けているか、受けていないかの有無と、その影響を分析している。結論は、いずれの観点でも性教育を受けている若者は、性に関して肯定的な傾向にあることが見て取れる。これらの分析結果からも、「包括的性教育」の重要性を知ることができる。

冒頭の話に戻るが、彼らが学校教育において、「包括的性教育」を受けていたならば、セクハラ問題も人権意識のない発言もなかったのではないだろうか、と思うのは筆者のみであろうか。

（教育ジャーナリスト 日向野一生）

全国性教育研究団体連絡協議会

▶▶ 8月9日(木) 13:00～19:00
8月10日(金) 9:30～15:50 ◀◀

第48回 全国性教育研究大会

第47回北海道性教育研究大会札幌大会

テーマ

「生きる力」を育む性教育を目指して
～学校と関係機関が課題を共有し、連携した性教育の実践～

プログラム

- 1日目**：13:00～13:50 **開会行事** 挨拶・祝辞・開催地報告・次期開催地挨拶
14:00～14:50 **基調講演** 「学校における性に関する指導の充実について(仮題)」横嶋剛(文部科学省初等中等教育局健康教育・食育課健康教育調査官)
15:00～16:30 **記念講演** 「性別違和の理解」池田官司(北海道文教大学教授)
17:00～19:00 **懇親会** ホテルライフォート札幌 17階「サラ」(会費5000円。参加自由)

2日目：9:30～12:00 **分科会**

「小学校における性教育の実践」 「中学校における性教育の実践」
「高等学校における性教育の実践」 「特別支援学級・学校における性教育の実践」
「性教育の課題について様々な立場からの取組」

13:15～15:45 **課題別講座**

「性教育を学校全体の教育活動として進めるために」
堀内比佐子(全国性教育研究団体連絡協議会事務局長)
「知っていますか?デートDV」
須藤陽子(札幌市市民文化局市民生活部男女共同参画室男女共同参画課課長)
「助産師が育む『性』と『いのち』の話」
高室典子(一般社団法人北海道助産師会会長)
「思春期の教育と医療の連携」
藤井美穂(カレスサッポロ時計台記念病院・女性総合診療センター)
シンポジウム「性的マイノリティについて」
司会・遠藤俊明(札幌医科大学産婦人科/時計台記念病院)

会場 ホテルライフォート札幌(北海道札幌市中央区南10条西1丁目 TEL 011-521-5211)

定員・締切 定員・締切/300名・平成30年6月29日(金) 締切(定員になり次第締切)

参加費・問い合わせ先等

参加費/両日参加：一般6000円、学生2000円、1日参加：一般3000円、学生2000円

主催/全国性教育研究団体連絡協議会、北海道性教育研究会

協賛/日本性教育協会 後援/内閣府、文部科学省、厚生労働省ほか

問合せ先/札幌市立柏中学校内全国性教育研究大会・北海道性教育研究大会札幌大会事務局

TEL011-521-2341 FAX 011-521-2343

申込み先/ <http://he7.seikyoe.ne.jp/home/zenseiren/index.html> (「全性連」HPから新規申込) あるいは、

(株)近畿日本ツーリスト北海道札幌教育旅行支店 TEL011-281-5434 FAX011-251-7052

6/2 (土)

13:30~16:30

性暴力に関する 刑法改正をめぐって ～これからの課題～

講師

島岡まな (大阪大学法科大学院教授)
専門はフランス刑法、ジェンダー刑法学。性犯罪問題に
ジェンダー平等・弱者保護の視点の必要性を強調する論
文を多数発表している。

角田由紀子 (弁護士/東京・強姦支援センターリーガルアドバイザー)
日弁連「両性の平等に関する委員会」委員。NPO 女性の
安全と健康のための支援教育センター代表理事。安保法制
違憲訴訟の会共同代表。

会場 文京区民センター 2階 A会議室
(東京都文京区本郷 4-15-14)

主催 特定非営利活動法人
女性の安全と健康のための支援教育センター

問い合わせ等

参加費/会員 500 円 非会員 1000 円 ※事前申し込み不要
特定非営利活動法人 女性の安全と健康のための支援教育センター
<http://shienkyo.com>
Email: shienkyo@vega.ocn.ne.jp FAX03-5684-1412

▶▶ 6月9日 (土) 10:30 ~ 15:15 ◀◀

性の多様性を学ぶセミナー

～LGBTの若者の理解と教育現場での支援のあり方～

内容

10:30 ~ 11:40 LGBTの若者の理解
12:40 ~ 13:50 LGBTの健康リスクとその予防
14:00 ~ 15:00 LGBTの若者支援のあり方
15:00 ~ 15:15 質疑応答

講師 日高庸晴
(宝塚大学看護学部教授/厚生労働省エイズ動向委員会委員)

会場 CIVI 研修センター新大阪東 6階 E605
(大阪市東淀川区東中島 1丁目 19-4)

問い合わせ等

受講料/10800 円 (税込) 定員/100 名
対象者/行政・医療・教育・福祉部分野の保健師、助産師、看護師、
養護教諭、看護教員、教職員、医師、児童相談員ほか自殺対策、
人権擁護に携わる方
問合せ先/(一社)日本家族計画協会 研修担当
〒162-0843 東京都新宿区市谷田町 1-10 保健会館新館
TEL 03-3269-4785 URL <http://www.jfpa.or.jp>

7/28 (土)

7/29 (日)

第1回 ピアカウンセリングセミナー

～仲間へ寄り添いながら主体的な自己決定を支えるピアカウンセリング～

【プログラム】

- 1日目: オープニングエクササイズ、8つの誓約 (効果的なピアカウンセラーになるために)、アクティブリスニング、感情と向き合う。
2日目: オープニングエクササイズ、感情と向き合う4つのステップ、コ・カウンセリング実習、小集団を中心としたピアカウンセリング、ピアカフェ、終了式。

【講師】 高村寿子 (自治医科大学名誉教授/日本ピアカウンセリング・ピアエディケーション研究会代表)
前田ひとみ (熊本大学大学院生命科学研究部教授/日本ピアカウンセリング・ピアエディケーション研究会副代表)

【会場】 平和と労働センター・全労連会館 2階ホール
(東京都文京区湯島 2丁目 4-4)

【問い合わせ先等】

受講料/21600 円 (税込) ※思春期保健相談士は 19440 円 (税込) 定員/60 名
対象/精神的に健康で、保健師、看護師、助産師、(管理)栄養士、医師、養護教諭、教諭、保育士、カウンセラー、など。
問合せ先/〒162-0843 東京都新宿区市谷田町 1-10 保健会館新館 一般社団法人日本家族計画協会 研修担当
TEL 03-3269-4785 URL <http://www.jfpa.or.jp>

関西性教育研修セミナー 10 周年記念誌

性について、語る、学ぶ、考える



昨今は、性教育・性科学の世界にも新しい風が吹きつつある。性教育をめぐる5W 1H（誰が、何を、誰に、いつ、どこで、どのように教えるのか）には、異なる価値観の対立が伴うがゆえに、時として激しいバッシングに見舞われることもある。同時代を生きる古い仲間や新しい仲間とのつながりを大切にしつつ、性教育を次世代につなぐために自分たちにできることとは何かを常に問い続けてゆきたい。

本書は、関西性教育研修セミナーの10年間の取り組みをまとめるとともに、セミナー登壇者の何人かをお願いし、現在の性の課題と今後の展望について執筆いただいた。さまざまな現場や経験に基づくバリエーションある報告は、まさに性の幅広い側面を示している。

- 編集／関西性教育研修セミナー実行委員会
- 発行／日本性教育協会
- A4判・ソフトカバー 128頁
- 頒価 800円

主な目次

性暴力

教育現場における性暴力被害への支援と課題／野坂祐子
性暴力の「理解」と「治療教育」を求めて／藤岡淳子
規定される性、聞こえない声。／岡田実穂
資料

HIV / AIDS

記者から見たエイズ対策／宮田一雄
「ちいさな学校」の経験／ブブ・ド・ラ・マドレーヌ
HIV / エイズについての医療現場からのメッセージ／白野倫徳
HIV と性の健康／生島 嗣
資料

性の多様性

「語る」社会か「語らなくていい」社会か／土肥いつき
性別違和と子どもたち／康 純

「性」について考えること：西から東、そして北東北へ／宇佐美翔子
「性の多様性」と共生する社会に向けて／東 優子
資料

性教育

30年の性教育の実践／秋山繁治
知的障がいのある生徒への性の指導と支援／池川典子
LGBTを排除しない性教育のあり方／東 優子
資料

性と社会

社会は性に蓋をかぶせる／池上千寿子
「死にたいと思いつつも、助けてほしい」／渋谷哲也
二人の性科学者とNature vs. Nurture 論争／東 優子
性科学／教育の過去・現在・未来／ミルトン・ダイヤモンド
資料

◆本書は JASE ホームページ <http://www.jase.faje.or.jp/pub/pub.html> からお申し込みいただけます。

または、Email info_jase@faje.or.jp TEL 03-6801-9307 FAX 03-5800-0478 までお申し込みください。